

# 文芸

## 俳句

物音に寛めて独りの夜長かな  
池田 逸子

一言の緯深めし竹の春  
伊藤 敬子

天高し初孫写メール爺似かな  
今関満喜子

携帯の在りかを探す虫の声  
魚地 照子

秋灯下明日の旅路の地図かむ  
江森 悦子

見えぬ風捉えて爽やか散步道  
大谷 武彦

抱かれし遺骨に萩の風白し  
川島 孝夫

さわやかに異状なしてす内視鏡  
川島 通則

石庭を横切る瑠璃色蜥蜴かな  
向後 寛

爽やかに席ゆずらるる齢かな  
越川せつ子

はにかみてさわやか一礼登校児  
越川 義則

法要の記憶が語る彼岸花  
小松 藤男

日々好日南瓜づくしの膳の彩  
佐瀬 輝夫

沈黙の街流れゆく霧の朝  
宍倉 道子

さわやかな余生力まず過ぎしをり  
鈴木とし子

爽やかや八分待ちのローカル線  
鈴木 利子

ほろ酔ひの歩をゆるめ居り虫時雨  
玉虫 栗扇

爽やかに歩け歩こう友笑顔  
土屋美枝子

爽やかに響く拍手朝の宮  
土屋 義昭

長らへて昭和一桁秋の風  
戸村 静華

爽やかに風きる勇姿草競馬  
西崎さち子

秋風に歩をゆるめ行く散歩道  
早川 勇

勿体なやましき戦後は二番徳も  
大事に収穫必死でありき  
越川 福子

爽やかな散歩の道は心地よく  
初秋の畑に蝶ひとつ舞う  
土屋 好

子供より地デジのTV送られて  
画面の良さに見る時増える  
鈴木 益郎

平凡を幸やとして今を生き  
氣遣いくれる子らのやさしさ  
高梨 キヨ

九十の坂越え尚も生きなむと  
命を繋ぐ機器を入れ換ふ  
伊藤 定男

## 短歌

佐瀬さんの死を聞き驚き声もな  
まさかまさかと空に問ひたり  
吉岡 信子

白樺の木下にあまたの白百合は  
風を誘ひさ揺らぎみたり  
鈴木まさ子

旧姓で呼ばれ振り向きつかの間を  
タイム・トネル潜りあるなり  
八角 三枝

貝塚に見放るる上総野古へは  
遠浅の海広がらぬし  
西山満里子

厨辺に彼岸団子の湯気立つを  
嫁に謝しつつ佛に供ふ  
青木 秀子

寝かせむと絵本を読み聞かせある  
祖父のその声小さくなりゆく  
押尾 輝子

騒音の苦情のなき一軒家  
音量あげてCD聴きあつ  
田崎 尚美

流行と娘が買ひくれしカーデガン  
鏡の前にひとり着て見つ  
芹川 初子

笠森の奥に眠れる姉訪ね  
孫の運転で今日は訪ひ来つ  
平山 芳子

口で食む食の美味さを思ひ知る  
点滴続きし後のお食事  
池田 春江

残葉の帰りに偶然すれ違ふ  
友がなげれと言葉くれたり  
島田ますみ

秋の日にのおづ裂けたるかたばみか  
ひそけき音に種はじけ散る  
斉藤つね子

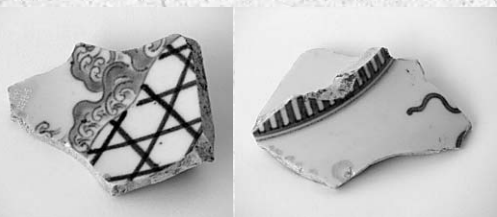
今から十年ほど前、発掘調査された芝崎遺跡から、染付磁器の小さな破片が一点出土しました。破片をよく見ると内面には、丁寧に描かれた波と網目文様があり、外面には少し高めの高台に櫛歯文様が付けられていました。両面とも表面の釉は鈍い光沢を放ち、文様と共に上品な仕上げと成っています。このような特徴から、この磁器は肥前の鍋島様式のお皿であることが分かりました。

肥前鍋島様式の磁器は、江戸時代の陶磁器の中で、最もブランド力があり、高価でなかなか手に入りませんでした。これは肥前（今日の佐賀県）を治めていた鍋島藩が、藩財政を豊かにするために、有田焼きの陶工の中から、優秀な工人を集めて、最も質の高い磁器を作らせ、それを徳川将軍家はじめ諸大名への贈答品としたものといわれています。その高度な技術が他へ漏出しないように、製作に当たっては厳しい管理が行われたといわれ、日本では

## こうほう博物館 32

### 江戸の宝物

唯一の藩窯です。今日でも残る鍋島焼の数は少なく、どれも優品ばかりです。その鍋島のお皿の破片が、なぜ芝崎の畑の中から出土したのでしょうか。鍋島焼は当初は贈答品として作られました。江戸時代後半になると、一般へも出回るようになったといわれます。質も多少は落ちたようですが、それでも高価な磁器で、裕福な豪商などが求めたようです。そのような器が芝崎から出たことは、裕福な農家がいたことを示しています。



内面 外面  
芝崎から出土した鍋島様式の皿